短歌新聞

THE TANKA SHIMBUN

昭和29年2月1日第三種郵便物認可
東京都杉並区高円寺南4-43-9
〒166-8555 発行所 短歌新聞社
電　話(03)3312－9185番
FAX(03)3312－3911番
振　替 00150-4-21683番
編集・発行人　石黒清介

「短歌新聞」購読の案内　一年分四円(税込)を振替又は本社へ前納下さい

必然としての歌集

インタビュウ　河野裕子氏に聞く

戦後の「青春歌」のもっとも激しい表現者として出発した河野裕子氏が、このほど第二十回齋藤茂吉短歌文学賞を受賞した。長く続く病のなかで、なお人間の生の意味を問い続けるその歌集のタイトルは『母系』。第十三歌集となったこの一冊について、じっくりとお話をうかがった。

――齋藤茂吉短歌文学賞の受賞おめでとうございます。

去年の夏以来、引っ越し、病気の再発、母の死去の他に遺産について思いもかけない事が起り、季節の移りにも気づかないほど呆然と暮しておりました。

受賞のお電話をいただきましたときも、何かひとごとのようでピンとこなかったのが正直なところです。

近代以降の歌人で最も意識し、越えがたい歌人と思いつづけてきたのが斎藤茂吉です。二十年余まえにアメリカから帰国しましたときに雑誌のインタビューを受け「女の茂吉」になりたいと口走ったことがありますが、その思いは今もかわりませんね。

――この度のお歌集は「死」というものが重いテーマになっていますが…。

「死」は若いころから、しばしば歌ってきましたが、それはまだ観念的なものだったような気がします。

八年半まえ病気が見つかって以来心身ともに一日としてまともな日はなく、文字通り生き延びるという感じで生きてきました。再発を主治医から告げられましたときは自分でも驚くほど冷静でした。家族のほうがショックだったようで、家族には心配をかけつづけて申し訳ないことです。

癌で死んでいった母を見ておりますので、病気の進行がどのようなものか自分なりにわかるところがあり、死については測りしれませんけれども、ひとりで受けいれ、ひとりで死ぬのが生き物であれば誰にもどうしようもないもので考えようもありません。

ただ、絵を描く姪が母の死に顔を三時間おきにスケッチしたということを聞きましたときに深く思うところがありました。

顔の皮膚が少しずつ骨に貼り付いていって、おばあちゃんは、君江さんでも、母でも妻でもなく、だんだん何というのかなあ、そのひとになって、戻っていかはったと姪が言いまして。

――『母系』というタイトルにはどんな思いが込められていますか?

歌集名には、毎回ああでもないこうでもないと考えて苦労するのですが、今回は何の迷いもなく『母系』にしました。第八歌集『歩く』のときもこれ以外ないと思って決めましたから。あのときは手術を受けた後、歩けなくなってしまい、歩くというあたりまえのことが、こんなに大切なことかと身にしみましてね。初めての孫が歩き始めておりまして、その子と手をつないで歩くお稽古をしました。

『母系』は、わたしの人生時間の丁度の時期に出た歌集であり、歌を作るはるかずっと前から用意されていたものが必然として今あらわれたという実感があります。

今回の歌集ほど、多くの方から装幀について色々な感想がきたことはありませんでした。装幀をしてくださった浜崎美幸氏は『母系』の仕事がすんでからしばらく腑抜け状態になられたそうですが。装幀見本を初めて手にとりましたとき、ああ、これはおっぱいだと思いましたね。暖かくて柔らかくて、なつかしくて。おっぱいとしか、わたしには言いようがありませんね。

「母」は子供を産むまえから、おそらく子供のころから、ずっと無意識のうちに抱えていた大きくて暗くて暖かな、何かだったような気がします。うまく言えませんけれども。祖母や母は教育も受けておりませんし、賢気なことはいっさい言わないし言えもしない人たちでしたが、存在そのものが、母だったような気がしまして。

産み育てるということがどんなに大変なことか、人生ではいちばんの大仕事であるか。息子たちの子育てを見ておりまして、今ごろになってやっと気がつきかけているところです。母は全生命的な本源から出ており、そこに行き来自在なものがあるのではないでしょうか。

――これで十三冊目の歌集になりますね。ご自身の歌歴をふりかえって、どんなことをかんじられますか?

ただ作りつづけて来た。それだけのことです。五十年ちかく作りつづけて来て、しみじみと人生は短いものだと身にしみてかなしく思います。

――今後のお仕事のご予定をお聞かせください。

生きてゆく。一日一日を何とか無事に生き渡ってゆく。それだけで精一杯。

時評

反抗というリバイバル

朝日歌壇「短歌時評」の穂村弘担当の最終回、「本物そっくりかリアルか(三月三十日)を行った問題提起につい村の文章は、なかなかこのので、そのニュアンスようとすれば、全文なければならない。不可能だから、端的てみる。

題になっている短歌もまた、現実からのがその本質ではないことに改めて気づかされる。それは短歌というジャンル内で長年流通してきた表現スタイルの、耐用期限についての問題なのだ〟

即座に、ここで述べられている〝リアル〟というものが、リアリズムなどとは何の関係もないことは、わかる。

これは、ひとつのヘゲモニー闘争の表れというしかないものであろう。

穂村の論旨はなかなか過激なものがあって、それは彼のいらだちを示すものかもしれない。

内山晶太、五島諭という二、三十代の作者の言を引き、およそ三、四世代ほど前の作家・稲葉京子の作を、ほとんど無用であるかのように結論づけるが、これは突然に降って湧いたような議論としか言いようがない。

なぜ、稲葉京子が、ここで出てくるか、まったく理解を絶するものがあるからだ。

二十代の作者たちが、貧しい知識のなかで、まずは暴言に近い発言をしたとして、それには目をつぶってもよろしかろう。しかし、穂村は、その彼らの発言をいわば〝利用〟して、稲葉京子の歌人としての立場を不当におとしめている。

「pool(プール)」という小冊子(?)における、無責任に近い発言を、大新聞に名差しで紹介した責任を、穂村はとれるのだろうか。

二十代の作家たちも、この穂村の発言を喜んで読んでいる場合ではないように思われる。

穂村が、彼らの意見を引用しながら、遠回しに行った発言は、稲葉京子という、およそ無抵抗な歌人を通じて、穂村の前世代――前衛短歌第二、第三世代あたりにまで、その矛先を向けるものだからだ。

これは、ひさびさに大がかりな反乱を予感させるが、しかし、それはそのまま、彼(ら)が拒絶した当の世代が、飽きるほどやりつくした手法だという感はぬぐえない。